

# 通信小海

## 情報統制？

牧師 水草修治



＊若者の犯罪激増？

「へ。そんなに減っているのか。意外だなあ。」日本の犯罪件数の動向にかんする統計を読んで驚いた。

十代後半の男子による殺人は一九六五年には百万人あたり五十人であったが、九十五年にはゼロに近くなっている。二十代前半の男子による殺人は、同じく一九五五年には一人、一九七五年には五十人、一九九五年には二十五人と確実に減少している。二十代前半の若者の中での殺人者出現率は未遂も入れて一九九五年には十万人あたり二十三人だったのが、一九九一年以降は二名と、四十年間で十分の一に減っている。

「今月の御言葉」  
「ちりはもとあつた地に帰り、霊はこれをくださつた神に帰る。」  
伝道者の書十二章七節

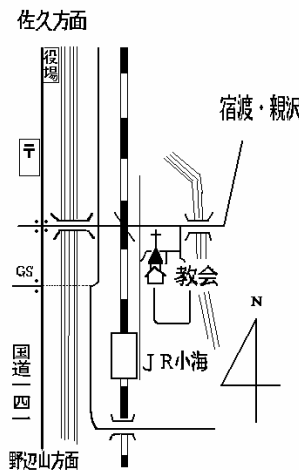
にもかかわらず、私たちは若者の凶悪犯罪が激増しているという印象をもっているのではなからうか。

こうした印象があまりに強いせいか、ときどき、「日本にも韓国のように、徴兵制があった方が、少しは若者たちの道徳が身につくんじゃないか。」などと口走る年輩者に出くわす。現実とは逆である。戦地で暴行・殺人・爆破を仕事とした帰還兵が多数住む社会では、凶悪犯罪が激増するのだ。それに、徴兵制が韓国の若者たちをどれほど苦しめ、学業を妨げ、軍隊に適応できず自殺者を出しているかといった事実は報道されもしない。

なぜ私たちは若者の犯罪が増加しているという印象を持っているのだろうか？ テレビや新聞が流すニュースのせいだろう。私たちは、マスコミによって、知らず知らずのうちに思想をコントロールされてしまっているのである。

日本同盟基督教団小海キリスト教会 牧師 水草修治  
会堂・牧師館 南佐久郡小海町大字小海四三三五 二七  
千三八四一一二 二六七九二四七七六  
カンパ宛先〒振替005300 61683

## 見晴台の教会へどうぞ



## 集会あんない

日曜日 サンデースクール 午前八時四五分  
朝礼拝 午前十時から十一時半  
夕礼拝 午後八時から九時半

水曜日 祈り会 午前十時半と午後七時半  
＊海尻・川上で毎月家庭集会あり。  
＊個人的な聖書勉強や個人的なご相談にも乗ります。

＊かつては無神論者

新聞やテレビだけではなく、学校教育においても、そうではなからうか。筆者はかつて無神論者を自任し、神がいると考える人々は、知性の劣る未開人だという印象を持っていた。しかし、調べてみれば、ニコトンもケプラーもガリレイもパスカルもアインシュタインも神の存在を信じている人々であつた。とんでもない誤解をしていたものである。

私は、千鳥幼稚園というキリスト教主義の幼稚園を卒園した。そこでは神様のことを教わつたはずである。それなのに、なぜ私はいつの間にか無神論者になつてしまつたのだろう。中学や高校での理科や世界史の授業や、テレビで流される「宇宙も生物も偶然できた」という無神論の教義に基づく番組のせいであつたらうと思う。

高校三年の秋、身辺のいたましい出来事から、人として生きる目的や意味を考えざるをえなくなり、友人に勧められて聖書を読むようになった。目がさめた。

「ああこの自然を造られた神がおられるんだ。この自分も神に造られた作品として

生きる意味があるのだ。」と。

「初めに、神が天と地を創造した。」

創世記一章一節

「主を恐れることは知識の初めである。

愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。」

箴言一章七節

## 福音指圧教室



今月はお休みです。

## 海尻井出博彦さんち

## で家庭集会

八月十七日(木)夜七時半から九時、聖書を読む会をしています。ご一報くださってお越しください。

96 2534

## 南相木でも家庭集会

＊ 八月十日(木)夜七時半から九時

＊ 日向中島悦子さん宅です。

＊ 家庭集会には牧師夫婦がでかけ、聖書を読んだり賛美歌を歌ったり、雑談したりします。どなたでもお気軽にどうぞ。

## じゃがいも全滅

## 野宿者自給の畑

先の大雨で、炊き出し支援のために作つていた山梨北杜のジャガイモ畑が、水浸しになり、収量四百キロの予定が十二キロとほぼ全滅。しかし、肩落とす間もなく、大根の種を蒔きました。

山谷農場事務局(藤田 寛)小海町芦谷ヒ

ルサイドコーポ一 二号室毎週金曜・土曜はおります。電話090・1436・6334

ﾌｻｸﾞﾖ42・786・2088

メール [nyoro@beige.ocn.ne.jp](mailto:nyoro@beige.ocn.ne.jp)

カンパニ振替 一四 四五三七九六

# 芸術家の作品



地は植物、種を生じる草、種類にしたがつてその中に種のある実を結び果樹を地の上に芽生えさせよ。』と仰せられると、そのようになつた。

「地は、その種類にしたがつて、生き物、家畜や、はつもの、その種類にしたがつて野の獣を生ぜよ。」と仰せられた。するとそのようになつた。

創世記一章十一節、二十四節

もし、花といえばヒマワリしかないという世界だったら、どれほど味気ないことだろうか。たとえヒマワリが大好きな人であっても、その単調さにうんざりしてしまつたろう。

どんなにネコ好きの人であっても、この世に人間以外の動物といえばネコしかないとなればどうだろうか？ これまたうんざりしてしまつたろう。

けれども、創造主が実際に造られた世界はなんと多様性に富んでいることか。いったい植物はこの世界に何種類存在するのだろうか？ 地球上に存在する高等植物だけでなんと二十五万種あるという。動物のほうは名前のついているものだけで二百万種を超えている。そのうち昆虫は百八十万種で、名前のついていないもの、未発見のものを含めればナント二千万種もあるのだそうである。

まさに、世界の動植物は「種類にしたがつて」造られている。

これらの種と種とは画然と区別されていて、放置しても交じり合うことはない。たしかに、動物園でむりやりライオンとヒョウをかけあわせれば、少々たてがみがあり、薄いヒョウ紋のついたレオポンという中途半端な動物が生まれる。しかし、レオポンは子孫を産むことができない一代限りなのである。トラとライオンのあいの子、トラとヒョウのあいの子もみな同じ運命である。ウマとロバのあいの子ラバも同じ。このように、種と種を隔てている壁は分厚くて乗り越えることはできない。最初から、ウマはウマ、トラはトラ、イヌはイヌ、ネコはネコである。リン

ゴは最初からリンゴ、ミカン是最初からミカンである。

人が効率のためにと考えて物を作ると、すぐに画一化してしまつた。たとえば、今の軽自動車は燃費がよく、人や荷物がたくさん運べるといふ条件をクリアするためにデザインされているので、どの車も似たり寄つたりで区別がつかない。私たちが住んでいるこの世界を造られた神様は単なる工業デザイナーではなく芸術家なのだろう。

パンダはなぜあんな黒と白の不思議な服を着ているのだろう。トラの縞模様はジャングルの中を獲物に悟られずに近づくための一種の擬態であると生物学者は合理的説明する。なるほど。けれども、パンダは森のなかにいようが、岩山にいようが、平地にいようが目立つ。それで、動物学者もついには手を上げて言った。「パンダは、神様のいたずらです。」

私たちが住んでいる世界は、なんでも科学的・合理的に説明し尽くせるつまらぬ世界ではない。この世界は、芸術家である神様の作品なのである。そして、あなたもまた神の作品である。

# 恩寵愛禱大士



川上村のKさんが天に召されて、半年以上が経ち、アラハカ（初墓参）に出かけた。墓誌には「恩寵愛禱大士」と深々と刻まれている。それは、生前のKさんについて思いめぐらすうちに与えられた「おくり名」である。

筆者とKさんとの初めての出会いとは十年ほど前のこと。その頃のKさんはすでに七十年代後半だったが、頭脳明晰な方とお見受けした。しかし、それまでキリストの福音をちゃんと聞く機会に恵まれることなく過ごして来られていた。

Kさんと親しくお話ができるようになったのは、「二〇一三年ほどのことである。Kさんの家で月一度聖書を読む会が始まったからである。何人かの近所の方たちが出入りされて、聖書のいろいろな箇所が開かれ、私が少々解説を加え、感想を思い思いに語り合う」というような肩のこらない集いである。

Kさんはその席には着かず、一間半離れたストーブのそばにいつも静かに腰掛けて、聞くともなく話を聞いておられた。

ある夕べの集いに、たまたま家の人以外いないことがあった。「じゃあ、きょうはKさん。こちらのコタツに来て話を聞いてみませんか。」と声をかけた。「はいよ。」とおっしゃってKさんは立ち上がって筆者の右の席に座られた。

そこで、筆者はイエス様のご生涯、特に、十字架に向かって行かれる場面をお話した。「イエス様は十字架の上で、自分を無実の罪であざけり苦しめ殺そうとしつつある人々のために、『父よ。彼らを赦してください。』と祈られたのです。」と。

話が終わるとKさんがまぶたを開けた。筆者は尋ねた。「ところで、Kさんは、イエス様はだれだとおもいますか？」すると、Kさんは「そりゃあ、神様にちがいない。」と断言なさったのだ。そして、「人のために自ら十字架を背負うなんてことは、神様じゃなきゃあできるわけがない。」と続けられた。この日、Kさんは神の恩寵にあずかり、一年半後には洗礼を受けられた。

イエス様を信じたKさんは俄然、祈りの人となった。しかも、自分のために祈るのではなく、いつもひたすら息子さん、娘さん、お嫁さん、お孫さんたちに、そして牧師である筆者のためにも神の祝福があるようにと祈るようになったのである。それは父として祖父としての愛に満ちた祈りだった。筆者が折々、Kさんと会話をしても、いつの間にかKさんはまぶたを閉じると祈り始めていたのだ。体調がすぐれない時にも祈られた。

昨年秋、Kさんは佐久病院の病床にあった。息子さんが病室に付き添っていたときのこと、声も出ないほど衰弱していたKさんが、力を振り絞るようになして両手を組み合わせ声無き祈りをされたという。

Kさんのうちに注がれたキリストの恩寵が、Kさんに最後の最後まで愛の祈りをさせてくださったのであろう。

八月一日、蝉の鳴く夏の日差しの下で墓誌に刻まれた「恩寵愛禱大士 召天」という文字を見ながら、恩寵を受けた者として、私も愛の祈りの人にさせてくださいと心のうち祈った。